

しょうが 唱歌の機能(3)

－ 新潟県糸魚川市天津神社舞楽の事例から －

伊 野 義 博

I はじめに

唱歌（しょうが）は「楽器の旋律・リズムに一定の音節をあてて口で唱えること。¹⁾」であり、日本の伝統音楽や民俗音楽の中で楽器の習得において重要な位置付けをなされてきた²⁾。

一方民俗芸能における舞や踊りなど、動きを伴った芸能においては、演者は唱歌を唱えそれを頼りに練習を重ねる場合がある。このような時、唱歌は細かな動きや所作にまで影響してくる。時には動きの様態により唱歌が決定づけられることすらある。こうした事実を踏まえると、唱歌の全体像を把握するには音楽・楽器という一側面のみでの考察では不十分であり、動きとの関係を捉えた上で考察することが必要となってくる。

本研究の目的は、動きを伴った芸能における唱歌の機能を明らかにすることである。先の小論³⁾では、地方の舞楽である新潟県能生町白山神社舞楽の事例分析を通してこの課題にせまった。その結果、少なくとも事例の舞楽においては、唱歌が楽・舞の双方の細部に渡って影響を及ぼしていること、さらに楽－唱歌－舞という脈絡の中で、唱歌が楽・舞の双方を結び付け、有機的に機能していることが判明した。

この研究を踏まえ、次に新潟県糸魚川市天津神社に伝わる舞楽を対象とし、唱歌について分析考察する中で、唱歌の持つ機能を一層明確にしていきたい。天津神社舞楽を選択したのは、この芸能が先に分析した新潟県能生町白山神社舞楽と同じ民俗芸能における舞楽であることによる。本稿ではまず基礎資料として天津神社舞楽の楽についてその詳細を提出する。具体的には楽と唱歌を五線譜により視覚化し、

楽の構成を明らかにする。

II 天津神社舞楽と楽について

1 祭礼における楽の流れ

天津神社舞楽は毎年4月10日及び11日、新潟県糸魚川市一の宮天津神社春季例祭において上演される（図1）。この祭礼は二つの御輿（一の御輿、二の御輿）がぶつかり合うことから「糸魚川のけんか祭」とも言われている⁴⁾。

ここではまず、祭礼時の楽の流れを大きく捉えておきたい。

祭礼当日午前1時、天候が良いと判断された場合「しゃぎり」太鼓（後述楽譜0-C）が入る。この太鼓により氏子に祭礼執行の合図がなされる。御輿は「押上」地区と「寺町」地区の氏子がそれぞれ一の御輿、二の御輿を毎年交代で奉仕する。午前11時頃、両地区の奉仕者が一の御輿担当の地区、二の御輿担当の地区順に集団となって登社する。この時また「しゃぎり」太鼓が打たれる。

引き続き舞台上で御輿降神祭が行われる。この際「御神酒」「魚」「桴」が奉納される。この桴は本役（ほんやく）によって毎年新調される。本役とは太鼓担当の役のうち中心となる人物である。太鼓（長胴鉦留め太鼓：以下「太鼓」と記述）は祭礼や舞楽の進行に欠くことのできないものであり、大変重要な役とされる。なお、この本役は毎年押上・寺町のうち一の御輿を担当する地区から選出される。

御輿降神祭がすむと、御輿の渡御となる。ここでは「三つ拍子」（楽譜0-A）が奏される。「三つ拍子」は、まず笛一管⁵⁾が入り、「始まり」「あおり」と吹奏し、「止め」で連笛（れんてき）⁶⁾となり、太鼓が打ち込まれる。（詳細は五線譜を参照されたい。III-3）。また「止め」では、法螺貝が入る。御輿は

楽の手引き』の発音表記を基本とした。

1 楽器

使用される楽器は、朱漆塗の横笛（10前後）・太鼓（長胴鉦留め太鼓）（1）・銅鑼（1）・法螺貝（2）・火炎太鼓（大太鼓：だだいこ）（1）である。楽器の基本的な編成は複数の横笛と太鼓の組み合わせである。銅鑼は抜頭、能抜頭、大納蘇利、陵王の大人舞の時に加えられる。法螺貝は陵王の退場時に吹奏される。なお、法螺貝は御輿渡御などで奏される三つ拍子（楽譜0）においても吹かれる。火炎太鼓は舞楽殿に設置され、舞楽の各演目の最初に開始の合図として次の楽譜のように打たれる。（「↓↓」）

なお、前述したように楽は舞楽以外の次の場面においても奏される（楽譜0）。

- ・10日午前1時：「しゃぎり」
- ・登社：「しゃぎり」
- ・御輿渡御：「三つ拍子」「お走り」「しゃぎり」（＋「カラウス」）
- ・祭礼終了時：稚児渡しの式：「三つ拍子」「お走り」「しゃぎり」（＋「カラウス」）

以下、楽の中心となる笛、太鼓、銅鑼について詳細を記す。

1) 笛：簫笛（しょうてき）

朱漆塗7孔の横笛、篠竹で作られている。10人前後により奏される。現在、祭礼本番において使用されている笛は、昭和63年に天津神社舞楽装束整備委員会により新調されたもの¹⁴⁾である。運指及び構成音は、図2のとおりである。楽はes-f-g-aの4音のみで構成される。また、練習では古い笛が使用されており、笛箱のふたの裏側には「京都笛師中川謹制

昭和十八年四月注文出来」、表に「寄進人 笛拾管 田鹿志ん」の記載がある。なお、昭和63年と昭和18年の間でさらに一回笛を新調している。そのため、練習用の笛には、太めのものと細めのものが二種類混在し、練習では楽人は双方を使用している。当然のことながら二種の笛の音高には半音程の差が生じている。従って、細めの笛を吹くと、その楽は、e-fis-gis-ais、という音の構成になる。図3に二種の笛の寸法を記す。（単位cm）

このように笛は各音の間隔が全音のみで成立しているため、独特な旋律を形成する。奏法は単純で、基本的に指孔を順次押さえたり開けたりして演奏をする。細かな装飾をつけ、時に g→a (gis→ais) の進行において指孔を少しずつ開放してすりあげるような旋律を作り出すのが特徴的である。

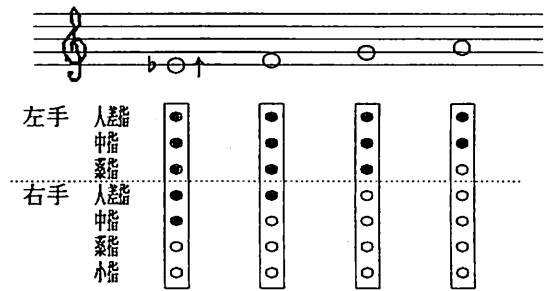


図2 横笛の運指

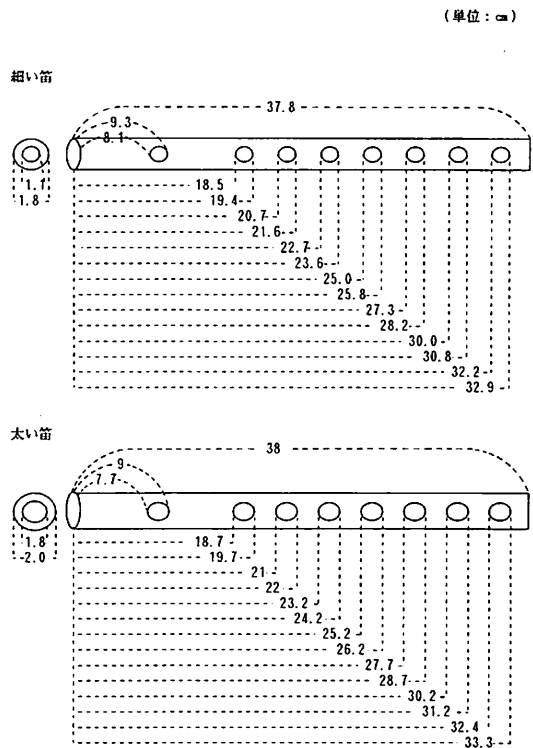


図3 横笛

2) 太鼓

図4に示すような太鼓が一台使用される。桴は板合（いたや）材を用い、毎年本役により奉納される。その奏法は革打ちと桴打ちに大別される。

革打ちには

- ・右手あるいは左手で革の中心を大きく打つ。
- ・右手で大きく打つ時直前に左手で小さく音を加

える（「受け杵」と言い抜頭で用いられる）。

- ・左右の手によるトレモロ奏法を行う。

などの打ち方がある。音量は基本的に強く奏されるが、明らかに強弱を意識して打たれる場合がある。

杵打ちには

- ・左右の手で同時に杵を打つ。

・左右の手で同時に杵の上方を打ちそのまま下方へ音を刻んでいく。この場合音は漸次小さく細くなる。

などの打ち方がある。

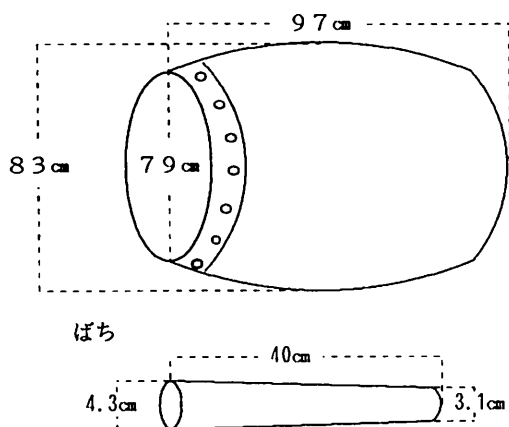


図4 太鼓

3) 銅鑼

銅鑼は舞楽練習時には用いられない。銅鑼の使用は祭礼当日のみである。杵は柳材である。抜頭、能抜頭、大納蘇利、陵王の大人舞の際、太鼓の革打ちに合わせて演奏される。

2 楽及び唱歌の視覚化と楽の構成

まず楽及び唱歌を演目順に五線譜を用いて記載する。また、各々の演目毎に楽の構成表を作成する。

1) 対象とした楽

・対象としたのは、筆者による舞楽練習及び祭礼当日のビデオ記録¹⁵⁾である。また、必要に応じて楽人に直接インタビューを行った。

・唱歌の旋律は指南の室川弘義氏が唱えられたものを基準とし、井伊光訓氏、楽頭（がくとう）の松本久氏をはじめ楽人の唱えているものを参考とした。その表記は『天津神社舞楽の手引き』に基づく。


2) 記譜上の要点

- ・五線譜による記譜法を用いる。なお、五線譜化

にあたっては、規範的な採譜¹⁶⁾をめざした。

・笛及び唱歌の楽譜は実音の記譜により、ト音譜表で表記し、太鼓（銅鑼）はヘ音譜表で表わす。なお、太鼓の場合、棒の上向きを右手打ち、下向きを左打ちとする。◇及び×による音符は杵打ちとする。

・楽人の唱える声の中には「動いて」とか「立って」などのように舞の動きを示す言葉や「ホー」「ヒーヤ」という掛け声も含まれる。動きを示す言葉は唱歌の中に（ ）にに入れて記入する。また、掛け声は唱歌の五線譜の中に×印の音符により示す。

・笛の音構成は、es-f-g-a、である。従って笛及び唱歌の譜表において調号は用いず、の形とする。

・強弱記号は基本的に用いない。ただし、太鼓については、強弱の相対的な変化が明らかに聞き取れるものについて記入する。

・楽は各々「句」あるいは「節」に分けて記載する。なお、句は1～2小節程度の短いまとまりとし、節は句よりも長いまとまりとする¹⁷⁾。

- ・長めの音にはL、短めの音にはBと記す。

・笛の装飾音符、太鼓奏法の右手、左手については個人差が見られる。

・唱歌は実際には『天津神社舞楽の手引き』に記載された以外のものも随時用いられている。これらは＜笛の音色を模倣したもの＞＜太鼓の音色を模倣したもの＞と分類される。従って笛の音色を模倣したものは笛の楽譜の下に、太鼓の音色を模倣したものは太鼓の楽譜の下にその唱歌を付け加えた。

・句や節には「始まり」「おおり」「止め」「三つ拍子」「七つ拍子」などの名称を持つものがある。また、「ころがしばち」や「捲く時の太鼓」など奏法を示す用語もある。さらに演奏上の約束として「笛一管」「連笛」という用語があり、それらは五線譜上に記入した。

・笛の音高を漸次高くしていくボルタメント奏法の場合、二つの音を／で結んだ。

3) 凡例

① 五線譜について

・御輿渡御の楽を0とし、出現する演目ごとに番号をつけて表わす。すなわち、

0：御輿渡御の楽 1：振鉦、2：安摩、3：鶏冠、4：抜頭、5：破摩弓、6：児納蘇利、7：能抜頭、8：華籠、9：大納蘇利、10：大平楽、11：久宝楽、12：陵王 となる。

・楽は各々の演目における出現順にアルファベット用いて記載する。また、句（1～2小節程度のま

とまり)と節(楽より長いまとまり)に分類し、句はアルファベットの小文字、節はアルファベットの大文字で表わす。

・同種の句または節については、同じアルファベットを用いる。その際、各々を区別するためにアルファベットの右に出現順に数字を用いて表わす。

② 楽の構成表について

・楽は舞に合わせ、登場、当曲¹⁸⁾、退場に分ける。なお、当曲において舞が複数の部分に分けられる場合、一部、二部…という形で表わす。

・五線譜に記された楽の記号を用いて、各演目毎にその構成表を記す。

・繰り返しの数は句または節を示すアルファベットの右の()の中に記入する。

・複数の句または節の組み合わせにより、楽の単位が形成されている場合、それらを[]を用いて括る。

・||: :|| は、この記号で括られた楽を繰り返すことを意味する。なお、:||の右側に×と数字を用いてその回数を示す。例えば、||: :|| × 5 ならば、||: :|| 内を 5 回繰り返すことになる。

・繰り返しが不確定の場合は、× n と表記する。

・一連の所作の区切りにおいては「ホー」「切つて」という掛け声が単独でかけられることがある。この場合各々「HO」「K」を用いて表記する。

・所作には「頂き」や「立ちの掃き」のように名称を持つものがある。その場合、相当する楽の回数の右にその名称を記す。

3 楽譜

次ページより

IV おわりに

本稿では、動きを伴う芸能における唱歌の機能を総合的に明らかにするための基礎資料として、新潟県糸魚川市天津神社舞楽の楽と唱歌について五線譜により視覚化し、その構成を明らかにした。

これをもとに、次稿では事例における唱歌の分析を行うとともに、楽—唱歌—舞の関係に注目し、唱歌についてさらに深く考察していきたい。

なお、本稿をまとめるにあたって、天津神社舞楽関係諸氏に多大な御協力をいただいた。深く感謝申し上げたい。

注

- 1) 吉川英史監修『邦楽百科辞典』音楽之友社 1984年 p.516
- 2) 唱歌に関する体系的研究としては次のものがある。
横道万里雄・蒲生郷昭『口唱歌体系—日本の楽器のソルミゼーション』CBSソニー 1978年、吉川英史「唱歌(楽器旋律唱法)の歴史と原理と機能」『日本音楽の美的研究』1984年 pp. 249~284
- 3) 拙稿「唱歌の機能(1)—新潟県能生町白山神社舞楽の事例から—」新潟大学教育学部紀要第37巻第2号 pp.307~325 及び「唱歌の機能(2)—新潟県能生町白山神社舞楽の事例から—」新潟大学教育学部紀要 第38巻第1号 pp.131~141
- 4) 天津神社祭礼については、次の文献も参考にされたい。
桑山太市『新潟県民俗芸能誌』錦正社 1972年、土田孝雄『神遊びの里 越後・西頸城三大舞楽と祭り』奴奈川郷土文化研究会 1984年
- 5) 一人の笛の奏者によりソロで吹かれること。
- 6) 複数の笛の奏者により演奏されること。
- 7) 昭和50年代までは、舞楽上演の前に休憩をいれたということである。近年時間の都合から、この休憩はとっていない。
- 8) ただし、破摩弓、久宝楽、陵王の開始では大太鼓は打たれない。破摩弓はその直前の演目である抜頭と、陵王はその直前の演目である久宝楽と番舞と考えられているためと思われる。『天神地祇』(後述注13)では、「抜頭と破摩弓は番舞ならんか。」(p.41)「久宝楽と陵王は番舞ならんか。」(p.61)という記述がある。なお、久宝楽の前で大太鼓が打たれないのは、その直前の大平楽の退場と久宝楽の登場が、連続して行われるためと思われる。
- 9) 「カラス」は「しゃぎり」の演奏中に加わる拍子である。「しゃぎり」太鼓の奏者が打つ面と反対側の杵を「カラス」の奏者が「しゃぎり」とは独立したテンポで加わる。
- 10) 練習の流れ及び舞の習得方法については、次の拙稿を参照されたい。「教わらない楽—民俗芸能に見られる音楽学習の側面—」『民俗音楽研究第19号』日本民俗音楽学会 1997年
- 11) 天津神社では、舞楽指導の総責任者のことを楽頭と呼ぶ。

- 12) 『天津神社舞楽の手引き』天津神社舞楽会編
糸魚川市教育委員会発行
- 13) 『天神地祇』一の宮舞楽研究会 昭和16年
- 14) 京都市, 株式会社「井筒」により制作された。
新調した本数は20本である。天津神社より送った見本をもとに制作したということだ。
- 15) 1996年: 3月28日, 29日, 30日, 31日, 4月7日, 10日, 1997年: 3月31日, 4月10日
- 16) 演奏がどのように奏されるべきものであるかを差し示す。金城厚「日本・アジア音楽の採譜と音楽分析」『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 第7巻 研究の方法』p.106 1989年 岩波書店
- 17) 剣持康典「能生白山神社舞楽の研究」上越教育大学大学院修士論文1992年の論文における表示を援用した。なお、楽の視覚化に際しては、この論文を参考にさせていただいた。
- 18) この用語は便宜上用いるが、天津神社では使用していない。

0 神輿渡御の楽

A1 ♩ = 25 三つ拍子

始まり 笛一管 二番

笛

太鼓

法螺貝

唱歌

あおり

とめ 連笛

A2 ♩ = 25 三つ拍子

始まり 二番

あおり

とめ

A 3 ♩ = 25 三つ拍子

始まり 連笛

二番

♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪-

あおり

とめ

♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪-

b1 ♩ = 190 お走り

♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪- ♪-

C1 シャギリ ♩ = 168 → 72 (祭礼の進行に合わせて次第に速度を落としていく)

笛

太鼓

唱歌

C2 シャギリ ♩ = 72

d1 ♩ = 126 カラウス

(音程不定)

1 振 銕

連笛

a 3 ♩ = 54

ころがしばちの時の太鼓

The musical score is written for three staves. The top staff is a treble clef with a key signature of one flat (B-flat). It begins with a tempo marking 'a 3 ♩ = 54'. The music consists of eighth and sixteenth notes. The middle staff is a bass clef with a key signature of one flat. It features a series of chords, some of which are marked with 'accel.' and a wedge indicating a crescendo. The bottom staff is a treble clef with a key signature of one flat, featuring a series of eighth notes. The score is divided into three measures by vertical bar lines. The first measure contains the initial tempo and key signature. The second measure contains the 'accel.' markings and the crescendo. The third measure contains the 'a tempo' markings and the final notes. The lyrics 'ころがしばちの時の太鼓' are written above the staves. The lyrics 'オー ヒャー ヒョー' are written below the first staff, and 'ドン' is written below the third staff.

accel.----- a tempo

accel.----- a tempo

オー ヒャー ヒョー ドン

2 安 摩

A1 ♩ = 80 笛一管 連笛 × n

B

B

D

ドッ ドッ ドッ ドッ
(手を回す時にアクセントをつける)

ドッ ドッ ドッ ドッ ドッ ドッ ドッ ドッ

acc. a tempo

acc. a tempo

オーイヒョーイ オーイヒョーイ オーイヒョーイ ヒョーイヒョーイヒョーイヒョーイ ヒョーイヒョーイヒョーイヒョーイヒョーイ

B1 ♩ = 56

f

ヒトー ツ フター ツ ミー ツ ヨー ツ ドンデンドン ジャー ドンデンドン ジャー ドーン ドン ジャー ドーン ヒョー

B2 ♩ = 56

f

ヒトー ツ フター ツ ミー ツ ヨー ツ ドンデンドン ジャー ドンデンドン ジャー ドーン ドン ジャー ドーン ヒョー

C1 ♩ = 56

f

p mp

ドッ ジャー リー ドッ ジャー リー ドッ ジャー リー ジャー ヒョー

D1 ♩ = 56

f

p mp

ドッ ジャー ドッ ジャー ジャー (もう一つ) ドッ ドッ ドン ジャー ドッ ドン ジャー ドン ドン ジャー ドン ジャー ヒョー

3 鶏 冠

出の三つ拍子

A1 ♩ = 54 笛一管

連笛

オーヒャヒビョー ヒャー オーヒャーヒビョー ヒャー ヒャイヒャイヒビョー ヒャー オヒャーヒ ヒー

A2 ♩ = 54

オーヒャヒビョー ヒャー オーヒャーヒビョー ヒャー ヒャイヒャイヒビョー ヒャー オヒャーヒ ヒョー

a1 ♩ = 54

ころがしばち

オー ヒャーヒビョー けろ けろ けろ けろ けろ けろ けろ けろ ドーン

B1 ♩ = 54 セツ拍子

(頭から) ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー (静かに) ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー

ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー ヒャーヒビョー

b1 ♩ = 54

ヒリ ヒー イ

A3 ♩ = 54

ドン ドン

オー ヒャ ヒョー ヒャー オー ヒャー ヒョー ヒャー ヒャイ ヒャイ ヒャー ヒャー オ ヒャー ヒ ヒョー

a2 ♩ = 54

ヒ ヒー ヒー ドン ドン

3 鶏冠の楽の構成

登場 A1(1)-A2(1)-a1(1)-

当曲 B1(26)-

退場 B1(3)-b1(1)-A3(1)-a2(1)

4 抜頭

a1 ♩ = 60 笛一管

笛

太鼓
銅鑼

唱歌

* 銅鑼は太鼓の中打ちのみを奏する（他の演目も同様である）

a2 ♩ = 60 連笛

a3 ♩ = 60

a4 ♩ = 60

* () について：「反り」をいれる時のみ一拍めを強く奏する。

a5 ♩ = 60

* 笛（唱歌）は、一所作に合わせて、拍が伸縮する。太鼓は、規則的に打つ。

a6 ♩ = 60 ♩ = 96

() 内は「反り」の所作の時のみ

a7 ♩ = 96

a8 ♩ = 96 ♩ = 75

a9 ♩ = 96

b1 ♩ = 72

c1 ♩ = 104 笛一管 ♩ = 84

c2 ♩ = 104 速笛 ♩ = 84

フ フ コ フン ジョー フン フン ㍻

c3 ♩ = 104

f p

♩ = 126

c4

f p

♩ = 104 ♩ = 84

c5

f p

4 抜頭の楽の構成

登場 a1(1)-a2(27)-a3(1)-a4(1)-a5(9)(桜)-a4(1)(桜のすわり)-

当曲

一部

a5(8)-a6(1)(三の本位)-a7(8)(一の本位)-a8(1)-a7(8)(二の本位)-a8(1)-a7(8)(四の本位)-

a8(1)-s7(6)-a9(1)-HO-b1(1)-休み

二部

c1(1)-c3(2)-c3(7)(豆拾い)-c4(4)-c5(8)(豆拾い)-

退場 c5(3)

A2 ♩ = 54

オー ヒャ ヒビョー ヒャー オー ヒャー ヒービョー ヒャー ヒャ イ ヒャ イ ヒービョー

ヒャー オ ヒャー ヒ ビョー

b2 ♩ = 54

オー ヒャー ヒ ビョ ドン ドン ドン

5 破摩弓の楽の構成

登場 A1(1)-b1(1)

当曲 C1(28)-HO-C1(2)-

退場 C1(4)-c1(1)-A2(1)-b2(1)

cl ♩ = 54

cl ♩ = 54

トン テン トン トン トン

D1 ♩ = 54 笛一管

D1 ♩ = 54 笛一管

トン タ リ トン タ リ トン タ リ シー ヒー

D2 ♩ = 54 連笛

D2 ♩ = 54 連笛

トン タ リ トン タ リ トン タ リ シー ヒー

E1 ♩ = 54

♩ = 120

♩ = 54

E1 ♩ = 54

トン タ リ トン タ リ トン タ リ トン トン シー トン トン シー トン ヒー

E2 ♩ = 54

♩ = 120

E2 ♩ = 54

トン タ リ トン タ リ トン タ リ トン トン シー トン トン シー トン トン シー トン トン シー

7 能抜頭

Al ♩ = 92 笛一管 連笛 × 6

笛

太鼓
銅鑼

唱歌

♩ - イ ts- イ ♩ - イ ts- イ ♩ - イ ts- イ ts- ヒヨセヨセヨセヨイヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイ... ヒ-ヒ-ロ-ヒ-

accel.----- a tempo

accel.----- a tempo

a1 ♩ = 92

♩ - イ ts- イ

a2 ♩ = 92

♩ - イ ts-

b1 ♩ = 80

ts- ts- ro- ts-

c1 ♩ = 72or126

♩ - ts- ro- ts- ro- ts- ro- ts-

(足だ) (頭だ)

c2 ♩ = 132

ドン ドン グ タ ズン シン ドン

c3 ♩ = 132

ドン グ タ ドン グ タ ドン グ タ ドン シン

d1 ♩ = 72 笛一管

おん おー らー おー ツ ショーン ショーン

d2 ♩ = 72 or 144 連笛

おん おー らー おー ツ ショーン ショーン

d3 ♩ = 72 ♩ = 138

おん おー らー おー ツ ショーン ショーン ショーン ショーン

d4 ♩ = 108

お ま らー ねー ツ ちゃん コー ゴん ゴん

7 能抜頭の楽の構成

登場 A1(1)-

当曲

一部

a1(8)-a2(1)-HO-b1(1)-c1(6)-c2(2)-c1(1)-c3(1)-c1(1)-||:[c2(2)-c1(4)]:||×4-

HO-c3(1)-c1(1)-休み-

二部

d1(1)-d2(8)-d3(1)-d2(10)-d3(1)-d1(1)-

退場

d4(6)

8 華 籠

A1 ♩ = 54 笛一管

オービャビョー ヒャー オセセセヨー ヒャー ヒャイヒャイセヨー ヒャー オヒャーヒ ヒョー

A2 ♩ = 54 連笛

オービャビョー ヒャー オセセセヨー ヒャー ヒャイヒャイセヨー ヒャー オヒャーヒ ヒョー

a1 ♩ = 54

オー ヒャセヒョ ころがしばち ドーン

B1 ♩ = 54 三つ拍子

(静かに) ヒャヒャーイ ヒト ドン ドン アイツ ミー タン ガイツ ミー カット オン ドン

B2 ♩ = 54 七つ拍子

(静かに) ヒャヒャーイ ヒト ドン (立って) アイツ ミー ミー 7 3

3- 3 (持ちかえて) い - - 7 ム-7 ム- - 7 オ - ナ ナ ナ ナ ナ ト- オン ド-ン

8 華籠の楽の構成

登場 A1(1)-A2(2)-a1(1)-

当曲 ||:[B1(1)-B2(1)]:|| × 15-

退場 ||:[B1(1)-B2(1)]:|| × 2

cl ♩ = 52

rit.-----

rit.-----

ヒー ヒー ヒー ヒー

D1 ♩ = 44 笛一管

L

L

f

p

ドーン タ リ ドーン タ リ ドーン タ リ タタ ヒー ヤ

D2 ♩ = 44 連笛

L

L

f

p

ドーン タ リ ドーン タ リ ドーン タ リ タタ ヒー ヤ

E1 ♩ = 50

f

p

ヒー ヒー ヒー ヒー

dl ♩ = 44

L

f

p

ドーン タ リ

10 太平楽

A1 ♩ = 54 笛一管

連笛



オーヒャビヒョー ヒャー オーヒャセヒョー ヒャー ヒャヒャヒャヒョー ヒャー オヒャーヒ ヒョー

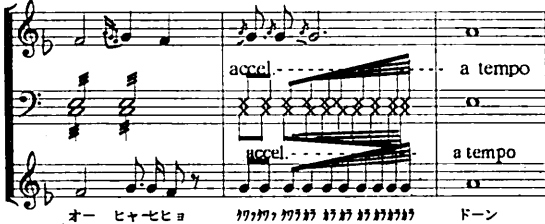
A2 ♩ = 54



オーヒャビヒョー ヒャー オーヒャセヒョー ヒャー ヒャヒャヒャヒョー ヒャー オヒャーヒ ヒョー

a1 ♩ = 54

捲く時の太鼓



オー ヒャセヒョー ドーン

B1 ♩ = 54 三つ拍子



ヒャリ ヒャー イ ヒト ドン ドンアイツ フ タン ガイツ ミ カットーオン ドン

B2 ♩ = 54 七つ拍子



ヒャ ヒャー イ ヒト ドン (聴いて) フ タン ガイツ ミ カットーオン ドン

3- 3 (持ちかえて) イ - 7 4- 7 4- 7 4- チー チー チー チー トー オン ドン

c1 ♩ = 54

チー チー - ト トン ドン

b1 ♩ = 54

チー チー イ ト - - ドン ドン

D1 ♩ = 54 笛一管 連笛

ミ ドン ドン ミ ドン ドン ミ ドン ドン ミ ドン ドン ミ ドン ドン

d1 ♩ = 54

い う う

E2 ♩ = 54

い ドン ー 7 い ドン 7ー 7 い ドン ミー 7 い ドン ー 7 い ドン 7ー 7 (さした) わん ドン その足で い ドン ドン

E2 ♩ = 54 受ける時

い ドン ー 7 い ドン 7ー 7 い ドン ミー 7 い ドン ー 7 い ドン 7ー 7

い ドン ー 7 い ドン 7ー 7 (いくぞ) わん ドン わん ドん い ドン ドン ー 7

E3 ♩ = 54 飛ぶ時

34 ドン ヒー 7 34 ドン 78- 7 34 ドン ミ-7 8- お 12 ドン お 12 お 12 お 12 ト ドン ヒー 7

10 太平楽の楽の構成

登場 A1(1)-A2(1)-a1(1)-

当曲

一部 (鉦の舞)

B1(3)-B2(3)(剣指七つ拍子、天・中・下)-||:[B2(1)-c1(2)]:|| (鉦)×6-b1(1)-休み-

二部 (太刀舞)

D1(1)-d1(5)-E1(10)-E2(1)-E1(2)-E2(1)-E1(2)-

E2(1)-E1(1)-E2(1)-E1(2)

退場 E1(1)-E2(1)-久宝楽へ

11 久宝楽

a1 ♩ = 108



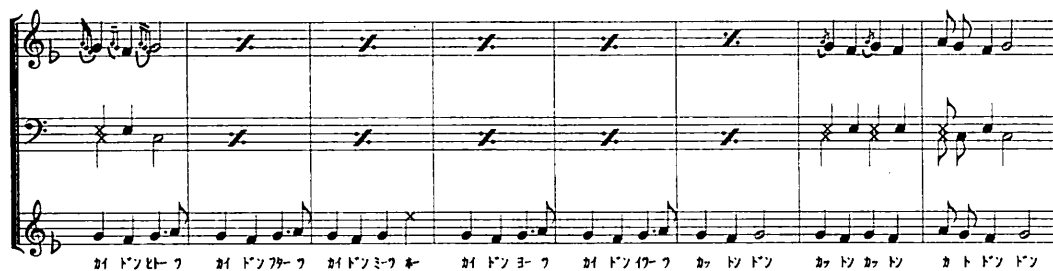
a2 ♩ = 66



A1 ♩ = 66



A2 ♩ = 66



A 3 ♩ = 66

お ドン ヒー フ お ドン 79ー フ お ドン ミフ ち お ドン ヨー フ お ドン 47ー フ

お ドン ムー フ お ドン 77 77 お フ ドン お フ お フ お ト ドン ドン

A 4 ♩ = 66

お ドン ヒー フ お ドン 79ー フ お ドン ミフ ち お フ ドン お フ お フ お ト ドン ドン

11 久宝楽の楽の構成

登場 a1(n)-

当曲 a2(3)-A1(1)-A2(1)-A1(1)-A2(1)-A1(3)-A3(1)-A3(1)-A1(2)-A3(1)-A1(2)-
A4(1)-A1(1)-A4(1)-A1(1)-

退場 A1(2)-A2(1)

12 陵 王

A1 ♩ = 66

笛

太鼓
銅鑼

唱歌

カイ トンヒト-ツ カイ トンフタ-ツ カイ トンミ- ツ カツ トン カツ トン カ トドンドン

b1

(左右交互に奏する)

ドントンドンンドン...

c1 ♩ = 66

L

オー イ ヒョー イ

d1 ♩ = 66

オー ヒー

b2 ♩ = 120

(左右交互に奏する)

ドン ドン ドン ドン ドン...

b3 ♩ = 120

トントントント...

E1 ♩ = 92

ヒ カ カカ カ カカ カカ カ ト ドン コ ドン ドン ドン

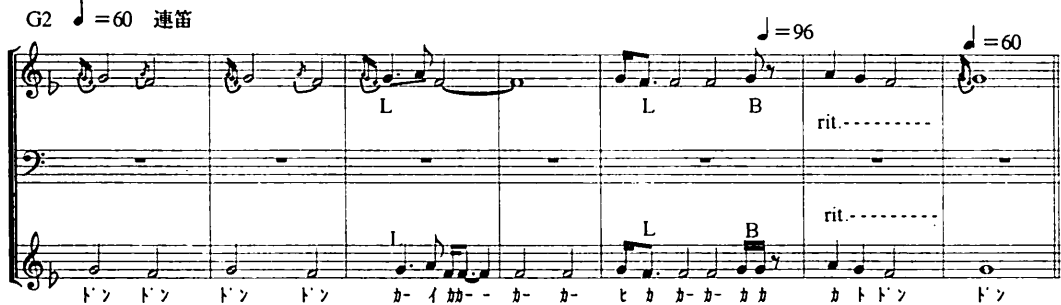
f1 ♩ = 56



G1 ♩ = 60 笛一管



G2 ♩ = 60 連笛



G3 ♩ = 60



笛
法螺貝

b4 ♩ = 66

× n

f *mf* *mp* *f* *mf* *mp*

ドン ドン ドン ドン ドン ドン

11 シャギリ ♪ =168→72 (祭礼の進行に合わせて次第に速度を落としていく)

[illegible]

12 シャギリ ♩ = 72

[illegible][illegible]

12 陵王の楽の構成

(＊練習及び本番では部分的に省略して舞われることが多い。従って下記順序は『天津神社舞楽の手引き』と異なるところがある。)

登場

A1-b1(4)(腰)-K-[c1(3)(右の鼻)-c1(2)(頂き)-c1(3)(左の鼻)-c1(1)(頂き)]-[c1(3)

(右の鼻)-c1(2)(頂き)-c1(3)(左の鼻)-c1(1)(頂き)-d1(1)(飛ぶ)]-HO-b1(3)(腰：走縁

の本位)-b1(4)(腰：陵王の松)-b1(4)(腰：稚児桜)-

当曲

一部

b1(3)(腰：中)-K-[c1(3)(右の鼻)-c1(2)(頂き)-c1(3)(左の鼻)-c1(1)(頂き)-d1(1)

(飛ぶ)]-HO-b1(3)(腰)-[b2(1)(すわり拝み)-b3(6)(すわり拝み)]-K-[c1(3)(右の鼻)

-c1(2)(頂き)-c1(3)(左の鼻)-c1(1)(頂き)-d1(1)(飛ぶ)]-HO-

b1(3)(腰)-[c1(3)(右の鼻)-c1(2)(頂き)-c1(3)(左の鼻)-c1(1)(頂き)-d1(1)

(飛ぶ)]-HO-b1(3)-[b2(1)(すわり拝み)-b3(6)(すわり拝み)]-K-c1(9)

(かかとの上げ下げ)-d1(1)-HO-

(天神地蔵には、この間「抱き」「膝」の舞い方があるが現在は継承されていない。)

b1(3)(腰)-K-[c1(3)(右の鼻)-c1(2)(頂き)-c1(3)(左の鼻)-c1(1)(頂き)-d1(1)

(飛ぶ)]-HO-b1(3)(腰)-[b2(1)(腰拝み)-b3(6)(腰拝み)]-K-c1(12)-d1(飛ぶ)-HO-

E1(3)-f1(2)-休み

二部

G1(1)-G2(1)-G3(8)-H1(5)-HO-b1(3)-K-

退場

C1(8)-d1(1)-HO-b4(1)-K-I1(1)-I2(2)